

真実はどこに？—WHO と IAEA 放射能汚染を巡って

製作：フェルダ・フィルム・スイス 2004

このDVDは、WHO 世界保健機関と IAEA 国際原子力機関が共同で開催した、2001 年キエフ国際会議の様態を捉えた、とても貴重なドキュメンタリー。

冒頭、被曝した 14 歳の子どもが膠原病と訴える姿に胸が痛む。チェルノブイリ原発事故のあった 1986 年から 5 年間、WHO がチェルノブイリの現場に不在であった。WHO は IAEA に現地調査を一任したという。バーゼル大学ミシェル・フェルネックス医学博士は WHO と IAEA の癒着を告発する運動のリーダーの一人だ。本来、健康を守る組織と原発を推進する組織とは利害関係が相反する。1959 年に両者が調印した協定で、WHO が健康被害の実態を調査をすることが禁じられた。

IAEA-WHO 協定 (1959 年)

50 年前の 1959 年 5 月 28 日、IAEA (国際原子力機関) との目立たないが重要な協定が WHO (世界保健機構) の会議で発効された。"原子力の平和利用 (Atoms for Peace)" を掲げる UN (国連) はその 2 年前、1957 年に設立された。形はどうあれ原子力に関連する WHO の様々な活動に対し、この協定の発効は IAEA に事実上の拒否権を与えることとなった。それは人間の健康に及ぼす核放射能 (radiation) の危険性についての警告や調査という WHO の本来の役割を阻んだのだ。

1995 年当時の WHO 事務局長、中嶋宏博士は 700 人の医師や専門家を集めてチェルノブイリに関する国際会議を開いて情報を広めようとしたが、議事録は IAEA の妨害によって一切発表されなかった。チェルノブイリの真実が知らされれば原子力産業の推進に大打撃となりうるからだ。IAEA には莫大な資金があり、貧しい国の専門家を買収するのは容易で、1 万ドルで随分買収できるという。

中嶋宏博士は、IAEA は国連安保理に従属し、人々の健康を守る組織が核開発の組織に従属していることをきっぱり認めた。2001 年 6 月 4 日、キエフでの会議で国連人道問題事務所の D・ズプカは、チェルノブイリの被害者は 900 万人と見積もり、その悲劇は始まったばかりだと述べている。

抗がん剤の投与で毛髪がすっかり抜けてしまっている少年たちの映像は本当に悲しい。チェルノブイリから直線距離で 80 キロに住む若い女性は男の子を抱えているが、生まれつき奇形児で、敗血症と化膿性脳膜炎を患っているという。80% の女性が免疫機能が弱っているという。モシールでは新生児の 30% が蘇生措置を必要としているという。被曝した女性は自分が被曝したということは全く知らず、子どもが病気になるということも知らなかった。しかし、検査で明らかだ。被爆当時はみんな少女だった。

IAEA の A・ゴンザレス代表は、チェルノブイリの死者は 31 人、高線量被曝者は数百人、甲状腺がんを発症したのは 2000 人の子どもという数字を採用しているという。この機関はアメリカのロスアラモス研究所やフランスの原子力庁という核爆弾を製造した報告書しか認めていない。ガンの増加についても科学的証明は一切ない。国連科学委員会の見解は IAEA と同じで、この機関の報告書は各国政府に採用され、これをもとに放射線防護や安全基準が定められている。深刻な健康被害を心配する必要はないという。「信じる者には説明不要で、信じない者には説明しても無駄だ」という。

彼らは賠償金を節約したいだけだとの批判が上がった。科学的根拠として語られるが、非科学的決めつけでしかない。

老婆は言う。放射能は気にならないかの問いに、そんなもの目に見えない。放射能は体にいいと言われているがとの問いには、年寄りにはいいかもと答えている。そして寧ろ壮年の人が今死んでいるという。前は道の数十人の子どもがいて、にぎやかだった。でも今はあそこの子ども 8 人は今は無気力だ。昔の子どもと違う。今は横になって眠るか、ずっと座っているだけだ。

ロシア科学アカデミーのA・ヤブロコフは、一番心配されるのは遺伝子への影響だという。またバンダジェフスキーは現在裁判にかけられているが、9年の懲役を求刑されている。彼は突然死と放射線核種の体内接種との直接のかかわりを明示している。彼は汚染地域で9年間研究を重ね、食べ物を介して摂取されたセシウム137が生命の維持に必要な臓器を徐々に破壊していくことや、臓器によって蓄積濃度が変わること、更に一部の臓器に高い汚染が見られることを発見した。そしてセシウム心筋症という新しい病理の存在を明らかにした。セシウム汚染の期間と量がある限度を超えると、心不全が慢性化し、全快は不可能になる。その直後、汚職の疑いで逮捕された。

流産の増加、死亡率の上昇、新生児患者の増加、遺伝子への悪影響や先天性奇形児の増加、癌の増加、精神機能発達の遅れ、精神病患者の増加、免疫系の状態悪化、ホルモンの状態変化、心臓血管系の病気、子どもの成長の遅れや異常な衰弱状態、病気回復の遅れや老化の加速、せめてこのリストは認めるべきだ。

体内に長期間蓄積した放射性核種に起因する症候群、全く新しい症候群、これをなぜ否定できるのか、これは科学だ。

これに対し、ヤルモネンコ放射線生物学者は、ヤブロコフ氏の発言は畑違いも甚だしいという。放射線生物学者でも、放射線科医でもない故、彼はなんの専門知識も持ち合わせていない。という。彼は汚染地区の住民の大部分の避難を妨げたイルジン教授の一員である。この一団は子供でも妊婦でも老人でも病人でも誰でも許容できる悪名高い被曝線量35レム説を掲げていた。実際には放射線防護の国際機関が一般人に認めている値はその5分の1である。

ベラルーシ科学アカデミーゴンチャロバ生物学者・遺伝学者は、ここに新しいデータがある。日本の財団法人放射線影響研究所の科学者たちは発表しているもので、放射線による身体疾患について1999年に発表されたもの。いつか私たちの新情報を受け入れるときがくるでしょうと発言。彼女は、チェルノブイリから200キロ離れたセシウム137による汚染が比較的少ない地域で、世代を追うごとに悪化する魚の遺伝子に見られる異常について研究した。

体内放射線量が体重1キロ当たり50ベクレルとは体重10キロの子どもの場合、毎秒500の放射性原子が崩壊することを意味する。人体ではセシウム137はゼロベクレルであるべきだが、測ったばかりのこの子の数値は1万ベクレルもある。それは組織心筋、目を襲う。精神的発達にも影響を及ぼす。許すまじきことだ。メステレンコ教授はチェルノブイリ事故は人生を一変させる事故だった。ベラルーシ科学アカデミーで国際的な物理学者として彼は、軍事的理由により立ち入り禁止地域にある旧ソ連内の複数の町に入ることができた。すぐに事故の重大性を認識し、100キロ圏内の住民を即刻避難させるよう最高会議に要求した。その後、不安の種をまいたという理由でミンスク原子力所長を解任された。KGBから圧力を受け、あやうく2回の襲撃を逃れた。

メステレンコ教授は専門家のグループと共同で独立研究所を創設した。西洋のさまざまな基金に支えられて子どもたちの体内放射能を測定し、食物中の放射能を減少させる方法について情報を提供している。また体内に蓄積した放射性物質を体外に放出させるサプリメントを配布している。彼が測定した値はベラルーシ厚生省の発表した値の8倍になる。厚生省はこれを隠ぺいしようとしたが、彼の活動は合法的だったので服従させることはできなかった。バンダジェフ教授によると体重1キロ当たり50ベクレル以上汚染されると声明に不可欠な臓器が損傷される。

この15年の汚染は体内汚染ではないかとの問いに、違う、体内ではないと答弁。食品汚染により高

地域で被曝しているという指摘には、被曝が体内か対外かという考えは認めない。体内は深刻だと人々を騙しても彼らのためにならない。幼児を含め死に至る心臓疾患が観測されたとの指摘に、それが事故の結果だという軽率な結論を出しても公衆衛生を担う機関は人々を助けられない。子どもの放射能による疾患が見られることは聞いたことがないという。ベラルーシの大学関係者が9年間研究した。この研究に全く興味を持たなかったのかとの問いにはノーコメント。

ヤルモネンコと女医たちとの問答で、ヤルモネンコは、サンクオペテルブルグの良質な病院で簡単な治療をすれば1か月で傷害を取り除くことができるという。女医たちはそんなことはない、回復は一時的なものだという。1年後には再発し悪化するという。少量のセシウムで長期的な実験をした。放射能については全て知っている。チェルノブイリで学んだことは何もないと言いきる。チェルノブイリは無知な人々に教えただけだという。もしなにか影響があるというなら10回試しなさい。何かを主張することはその存在を証明する必要がある。証明の要点は2つ。自分自身によって再現が可能な事、第2に膨大な学問的経験と矛盾しないことだ。重要なことは子供たちが低線量被曝で死亡するということだという。

15年間で生まれた子どもたちは、事故の直接の影響は受けなかったが、汚染食品を食べ続けている。食物はイナゴのように国内に広がるので、ミンスクでは体重1キロあたり700～900ベクレルの子どもたちがみつかったも驚くに値しない。子どもの場合、1キロあたり50ベクレルを超すと腎臓疾患、心臓等の必須臓器に病気が現れる。子どもたちの健康状態は悪く、早期の対策が求められる。サヴキン放射線生物学者はICRP国際放射線防護委員会のメンバーで、内部被ばくは外部被ばくは取るに足らないと主張する。11万の検査結果が物語っている。新陳代謝の激しい子供たちには蓄積しにくいと考えてきたが、実際は子供たちに最も高い線量が観測される。

グスコバ医師は、1986年、重症被ばく者28人が死亡するまで治療にあたった。彼女はIAEAとの合意のもとに放射能の影響を過小評価した科学者グループに属し、健康問題を精神医学的に解釈し、放射能恐怖症とストレスが現任と診断した。現実問題、社会状況を正常化するためにはすでにかなり低下した放射線量を更にさげるのではなく、放射能を原因としない病気を治療するための社会構造、雇用や医療サポートを作ることが重要だと主張する。

クリストファー・バスビー物理化学者は、体内に問いこまれた放射性物質のリスクを研究する英国政府委員会のメンバーである。また欧州放射線リスク委員会(ECRR)の科学担当者として低線量被曝の健康への影響についての勧告文書を監修した。モーリス・スコットと共同して、欧州5か国と米国で幼児白血病の増加を示すレポートを提出した。これは明らかにチェルノブイリの影響だ。先の欧州議会では放射線リスクモデルの再評価を要求する決議が出た。これはチェルノブイリ事故以降、私が列挙した国に現れた定量被曝の影響を受けてのこと。当会議でも放射線リスクモデルの見直しを要求する必要がある。過去10年間に多くの証明がされ、明白な証拠が提出され超低量被曝であっても検出可能な影響、より強い影響が認められる。既存のリスクモデルを覆す事実だ。放射線に特に晒されたグループだけに注目してはならない。そんなことをすれば、チェルノブイリの放射能の影響の多くが見失われてしまう。

1996年か97年にスペインのセビリアで開催されたWHOとIAEAの合同会議で低線量被曝の定義をした。我々にはすでに明確な勧告事項がある。貴方の表明は正しいと思うのでこの勧告により正確に挿入されるべきだ。

会議で推薦されれば、兆低線量の影響に関して更に研究が進められることでしょう。しかし、彼の提言は結局会議の最終決議文が推奨する研究リストの中には加えられなかった。

事故から15年経た今、放射能は主要因ではない。放射能という要因はあっても唯一の原因ではなく膨大な社会的要因と絡み合っている。もうすべて終わったのだから今さら得体の知れない放射線を排除し、慢性症状と戦わねばと躍起になる必要はない。

我々は食糧不足で癌になったのではなく、まさに放射線が原因なのだ。

僕は血圧が高い。決会うが上がると頭が痛む。98年に脳卒中になって、3か月入院した。脳卒中のあと、左足と腕が麻痺、あと顔の一部、

僕は先天性の心臓欠陥がある。

生後3か月の時に心臓に雑音があることがわかった。

息が苦しく走るのがつらい。目の前が真っ暗になる。

子どもたちのこうした症状は統計学的に見て普通かとの問いに、生態系が確実に関与しており今後も増え続ける。チェルノブイリが関係していることは明らか。

もう3回梗塞になった。心臓発作だ。それから胃炎も。小学校の時。

子どもがこうした成人病を患うのは異常。成人特有の疾患が今、子どもを襲っている。

祖母の家において血圧が上がってめまいで立てなかった。心臓に欠陥が見つかった。

スペクトロメーターでの測定はこの地域では無理で、嚴重警戒地域の子どもは移動式のラボで測定している。でも全ての地域で受けられるわけではない。

政府は病院で治療を受けている子供たちの内部被ばくとの関連性を認めない。

問題は国連でこれらの統計を入手できないこと。どの政府もデータを送ってこない。国連の公式な統計がなくては何もできない。

バンダジェフスキー教授の裁判は現在進行中で400以上の科学論文と8冊の本を発表し、7つの特許を持つ、5つの国際賞を受賞し5つのアカデミーの会員でもある。しかし彼は2001年6月18日、ベラルーシ最高裁の軍事法廷で汚職の罪で8年の強制労働を言い渡された。1年間調査したが容疑に関しての物的証拠は出て来なかった。アムネスティインターナショナルは彼を良心の囚人とみなし、欧州議会は研究を継続できるように彼に銃のためのパスポートを発給した。欧州連合はベラルーシ刑法に照らしてこの裁判には8つの違反があるとして再審を求めた。

この会議の重要性は最終決議にある。その勧告事項が各国政府の放射線防護の基礎となるからだ。これによって数百万人の健康と運命だけでなく、原子力産業の名声までも左右されるのだ。

これはまぎれもない惨事だが、放射線の惨事ではない。

スイステレビ局の女性はIAEAも難事は避けて事を荒立てたくない。となだめた。

体内に取り込まれたセシウムが健康を害するというこの会議で表明された新しい科学的知見は最終決議文には盛り込まれなかった。今日、ベラルーシで健康とみなされる子どもは100人中20人である。チェルノブイリ事故以前は80%が健康とされていた。IAEA、UNSCEAR（原子放射線の影響に関する国連科学委員会）、WHOは体内に入った放射性物質による内部被ばくの影響を研究せず、子どもたちが患っている疾患の異様な増大についても一切説明していない。

以上